

身延山支院の成立と展開

林 是 晋

以下、立正大学宗学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』を「定」、正徳二年（一七二二）の身延山世三世遠祐院日亨の『身延山房跡録并日本国参詣宿房定』を『坊跡録Ⅰ』、萬延二年（一八六一）より始め明治十八年（一八八五）に稿成った覚林坊卅四世妙俊院日寿の『身延山坊跡録』を『坊跡録Ⅱ』とそれぞれ略称する。また支院には房・坊号を附すが、両者には何ら差異は認められないので資料中以外は坊を用うる。

第一節 支院の開創

身延山久遠寺は日蓮聖人が「日本国の中には七道あり。七道の内東海道十五箇国。其内に甲州飯野御牧三箇郷之内波木井と申。此郷之内、戊亥の方に入て二十余里の深山あり。北は身延山。南は鷹取山、西は七面山、東は天子山也。板を四枚つい立たるが如し。此外を回て四の河あり。從北南へ富士河、自西東へ早河、此は後也。前に西より東へ波木井河中に一の滝あり。身延河と名けたり。中天竺之鷲峰山を此処に移せる歟。將又漢土の天台山の来る歟と覚ゆ。此四山河之中に、手の広さ程の平かなる処」^①に、「文永十一年六月十七日に、この山のなかに、きをうちきりて、かりそめにあじちをつく」^②られた時を以て開創とする。それは「十二のはしら」^③を四隅にもつ建物、すなわち三間四面、現今の六十畳敷位の草庵であった。^④

この草庵において聖人は仏祖への給仕、法華經の説誦、著述等に励まれ、門徒の教育にも努められた。やがてだいに聖人を慕い、登山して修業する門徒の数は増加していき、弘安元年（一二七八）には「人はなき時は四十人、ある時は六十人」^⑤、弘安二年（一二七九）には「今年一百よ人の人」^⑥を数えるに至った。

これらの人々はどこに居住したのだろうか、文永十一年に建てられた草庵は前記したように六十畳敷位の広さしかなく、とても六十人、一百よ人の人が生活できる規模ではなかった。したがってその住居確保について二つの可能性が考えられる。草庵の拡張と、他の場所での新たな造営である。

最初の草庵を本院とみた場合、新たな造営は支院の発祥である。今も身延山内に連綿と存続する支院の起源は、このころまでさかのぼると考えられるが、しかしそれを直接伝える資料はない。

『坊跡録一』は醍醐谷下之坊の項で

宗祖為開基、大坊云上房、此房為下房、造立願主相亦村榎畑史姥^{法号}日仏之文永十二年九月八日成就^ス此日仏授与、本尊妙了寺有^レ之、

とするが、『坊跡録一』は正徳二年（一七一二）のものであり、文永十二年（一二七五）とは四百数十年もの開きがあつて、この記事は信憑性に問題がある。

下之坊縁起は

弘安三年庚辰高祖五十九にならせ給う。正月五日相股村史正左衛門の妻薩華優婆該兒を懐にして到り、嚮に難産の救を謝し、且つ、夫の死を悲しみ泣く、高祖もまた往ぬる日に粟の飯の響を語り出て、懐旧の涙をしばし催し給う。当下その妻謂ていはく、この児父なし、願くば師に投ぜん、妾もまた尼となつて菩提の道に入候らはば亡

夫もさこそ喜ぶらめ、と、高祖即時に許し給いその児を呼んで是好磨とし、母を呼んで妙了日仏となす。日仏大に喜びつつ日日至って高祖及び従弟の垢づける衣を滌ぎ、破れを繕ふを浄業となす。高祖これを憐み給い、これを身延の麓に居らしむ。今の下の坊その旧址なり、是好磨は成長の後、一の瀬妙了寺の開山にて日了といへる是なり^①

と伝えている。

同じ頃、小室日伝は日蓮聖人に帰伏し、建治元年（一二七五）醍醐谷に志摩坊を造営して、聖人に給仕したと伝える。

厥^レ当院開闢元祖大菩薩御弟子肥前公惠朝阿闍梨日伝上人。由来委尋、祖師御入山已後國中諸檀越成^レ三礼往行^二悉令^二帰伏^一、故甲斐国巨摩郡小室庄真言宗頭梁肥前公詣^二当峯^一高祖有^二对向^一、為^二三音物^一毒藥強飯并毒酒梟樽棒之。元祖仰云汝志者奇特雖^レ有^レ之其所持物者各以^二三毒藥^一拵送、哀成哉我宗広宣流布憎嫉趣也。肥前公答云曾而不^レ成^二左様思^二無^二三物牀^一二言説也、尊命難^レ有^レ拜為^レ申詣^二当山^一土座。仰云汝証拠見可^レ遂^二三帰依^一乎。肥前公答云其疑網告知者可^レ背^レ仰乎。元祖云然者曰此抱置白犬被^レ召雖^二汝畜類^一有^レ生此食物用我可^レ立^二三身替^一死以後建^二三高頭^一令^二三廻向^一而可^レ与^二三梵菩提心^一云々。彼犬蒙^レ仰毒強飯并毒酒悉^レ吹喚忽死。夫元祖經文御唱有^レ消^二三毒^一肥前公可^レ食^二子^一又食仰有。肥前公無^二是非^一雖^レ食^レ之何無^レ障毒不能害、金言難^レ有^レ思即座成^二帰伏^一、法華經持設^二三利度^一式、成^二御弟子^一、醍醐谷江建治元乙亥二月八日造^二三草庵^一、元祖大士江常随給仕矣。即授^二三当家祈禱之大事^一并^二消毒妙符之秘訣^一、此妙符爾来至^レ今当寺伝^二之^一。三年過小室江有^二三帰寺^一二千^レ時建武乙亥二月十二日御遷化也。^③

『坊跡録』にも

生国肥前国也

開基小室肥前公惠朝中老日伝聖人（二貞三三年）本真言宗山伏也、帰伏因縁犬塔婆、由来如_三世所_二云。

とあって、下之坊・志摩坊の兩縁起とも『坊跡録一』の著わされた卅三世日亨代までには既に成立していたことが知られる。

塩田義遜氏は縁起とは異なる見解を示している。すなわち、小室日伝は建長六年（一二五四）には清澄山に遊学して、既にこの当時日蓮聖人とは交友関係のあったろうこと。清澄に業なりて小室に帰り、当時真言宗たりし仁王山護国金胎寺を継承したが、日蓮聖人身延入山後縁あつて相識るに至り、終に弟子となり金胎寺の宗を改めて妙法寺と呼ぶに至つたものであらう。と推察されている。^④

しかし、もしこの見解が正しいとしても、この時期の志摩坊開創の有無についての証拠とはなり得ず、又縁起はもとも信憑性に乏しいものであるところから、実際に兩坊がこの頃より造営されたか否かは、他の有力な資料の発見をまつはかはない。しかし下之坊も志摩坊も醍醐谷にあつて、初期の支院の建立される場所としては、地理的にうなずけるものがある。

最初のかりそめの草庵から、弘安四年（一二八一）「坊は十間四面に、またひさしさしてつくりあげ……中略……十一月ついたちの日、せうほう（小坊）つくり、馬やつくる。八日は大坊のはしら（柱）だて、九日十日ぶき（葺候了）」と十間四面の大坊が新たに建立され、二十四日に落慶をみた。この時、身延山妙法華院久遠寺と名付けられたと伝えられる。^⑤

身延入山以来年々健康を害された聖人は、この年より更に病が悪化せられた。

去文永十一年六月十七日この山に入候て今年十二月八日にいたるまで、此の山出事一步も候はず。ただし八年が

間やせやまいと申、とし(齡)と申、としどしに身ゆわく、心をほれ(老)候つるほどに、今年は春よりこのやまいをこりて、秋すぎ冬にいたるまで、日々にをとるへ、夜々にまさり候つるが、この十余日はすでに食もほとをど(殆)とどまりて候上、ゆき(雪)はかさなり、かん(寒)はせめ候。身のひゆる事石のごとし¹²⁾

したがって翌弘安五年(一二八二)九月八日、掃省と療養の為、身延山を出立されたが、同十九日、波木井実長にいけがみ(池上)までつきて候。みちの間、山と申、かわ(河)と申、そこばく大事にて候けるを、きうだち(公達)にす(守)護せられまいらせ候て、難もなくこれまでつきて候事、をそれ入候ながら悦存候。さてはやがてかへりまいり候はんずる道にて候へども、所らう(勞)のみ(身)にて候へば、不ちやう(定)なる事も候はんずらん。さりながらも日本国にそこばくもてあつかうて候みを、九年まで御きえ候ぬる御心ざし申ばかりなく候へば、いづくにて死候とも、はか(墓)をばみのぶさわ(沢)にせさせ候べく候。¹³⁾

と申し送られ、十月八日本弟子六人、六老僧を定められ、久遠寺輪番等の遺言をなされて十三日御入滅になられた。十四日葬送茶毘式、御遺骨は十九日池上出発、二十六日身延山に納骨された。¹⁴⁾ 翌弘安六年(一二八三)正月、百日忌が営まれ、御遺言に基き久遠寺輪番が定められた。¹⁵⁾

第一周忌までの輪番はおおむね順調に勤められたが、支院の縁起は、この時六老僧は各々山内に草庵を構え給仕をしたと伝える。

支院名	開基	場所
南之坊	日昭	鷺谷?
竹之坊	日朗	西谷

林	樋	山	窪
蔵	沢	本	之
坊	坊	坊	坊
日	日	日	日
興	向	頂	持
醍	西	中	醍
醐	谷	谷	醐
谷		谷	谷

又、端場坊縁起は「四条金吾頼基は、日蓮聖人池上に入滅されるや、御真骨に侍して身延に到り、爾後山中に庵を結び、終世を御廟に服喪奉仕した。端場坊はその草庵の跡である」と伝える。^{①⑦} 当時四条金吾は、波木井実長の所領する南部とは、富士川をはさんで対岸の内船を知行していた。^{①⑧}

七十九世日慈代に、端場坊より本院へ寄附された本尊に、本院四世日善の本尊がある。建武三年（一三三六）二月七日に日祥法師に授与されたもので、日祥法師が端場坊歴代の日祥であるか否かは確定できないが、「坊跡録一」の端場坊の項には「第四世日善師本尊有之（建武三丙子年二月六日）端場坊六世（日祥授之）」とあって、かなり以前から端場坊に所蔵されていた本尊であり、また「明德五年（一二三四）甲戌五月二十一日毎日立願御本尊也端場坊日純授与之」と記された本院七世日叡の本尊も本院に所蔵され、日純は日祥の次の端場坊の歴代であることから考えて、日祥法師を端場坊六世の日祥としてよさそうである。とすると端場坊は少くとも建武三年には造営されていたことになる。日祥はそれから卅三年後の応安二年（一三六九）に寂している。^{①⑨}

その他この時期に開創されたと伝える支院は、

支院名	開基	場所
清水坊	日像	西谷

北之坊	波木井実長	鶯	谷？
鏡円坊	波木井実長の屋敷跡	梅	平
本行坊	比企大学三郎	西	谷

以下『坊跡録Ⅰ』によって知りうる限り支院の開創時期を整理してみると、

久遠寺輪番制はやがて廃止のやむなきに至り、日興は波木井実長との確執から身延を去った。ここにおいて久遠寺は、日蓮聖人を開山・初祖と仰ぎ、日向が二世となって住持制を確立した。以後次第に諸国よりの参詣人も多くなつていき、堂地の狹隘さ、拡張の必要性を強く感ぜられたのだから、十一世日朝は狭い西谷の地から現今の地に、本院の移転拡張事業を成し遂げ、身延中興の祖となった。この間に開創された支院は、

支院名	開基	場所	註
松井坊	日長	中谷	日長は波木井家三代 ^{②①}
大善坊	日辺	東谷	長祿二年（一四五八）十二月十二日造立
南延坊	日堯	鶯谷？	此寺往古、方丈下蔵有之朝師、代引今、地
花之坊	日応	南谷	開基長祿三年（一四五九）寂
東之坊	日源	〃	延曆寺…問答可有之云々…日善…身延東之坊日静、出玉
慶林坊	日慶	中谷	開基は十世日延の弟子 ^{②②}

日朝は文明十年（一四七八）、東谷へ行学院（覚林坊）を建立し、明応八年そこへ隠棲した。^{②③}以後卅二世日脱代まで開創された支院は、

支院名 開基 場所 註

限之坊 日意 醍醐谷 開基は本院十二世

円教坊 " 西谷 "

積善坊 日伝 東谷 開基は本院十三世

麓坊 " 西谷 "

法雲坊 日鏡 " 開基は本院十四世

定林坊 日叙 " 開基は本院十五世

延寿坊 穴山梅雪 塩沢 日叙代

南向坊 日新 西谷 開基は本院十七世

松林坊 日在 " 『坊跡録Ⅱ』に「棟札賢師文祿二癸巳九月」とある

覚樹坊 日蓮 東谷 開基は本院廿九世

一円庵 日脱 西谷

日脱は「貞享四年（一六八七）極月祈禱堂・番寮・廊下を建立し、天下安全妙法弘布の爲め、三十六人の僧侶を置き、昼夜不断に妙典を誦誦²⁴」させた。この祈禱堂三十六坊は

支院名 場所 支院名 場所

瑞光坊 上ノ山 芳春坊 西谷

芳心坊 " 信了坊 "

三十三世日亭代までに開創された支院は

仁	松	真	宗	顯	清	春	円	春	貞	忍	清	法	妙	長	慶
淨	玄	善	幸	成	閑	窓	光	光	俊	脱	玉	蘭	応	安	雲
坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊
〃	〃	〃	西	〃	〃	東	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	上
			谷			谷									ノ
															山

見	実	仙	宗	中	長	宗	清	長	高	淨	観	常	妙	洪	本
塔	道	台	賢	山	寿	林	耀	松	雲	蓮	松	榮	善	谷	学
坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊

棚	稻	中	〃	〃	〃	〃	〃	田	醍	〃	〃	南	〃	〃	西
沢	荷	谷						代	醐			谷			谷
								谷							

この他に年代未祥日亭代までに開創された支院は

支院名	開基	場所	開創年代
心達坊	円信院日行	東谷	元禄十一年(一六九八)六月廿八日
智寂坊	三十二世日省	〃	宝永元年(一七〇四)
学立坊	学立院日詮	〃	正徳二年(一七二二)
武井坊	日勢	東谷	
真浄坊	日眷	〃	
成道坊	日成	〃	
南林坊	十行坊日願	〃	
杉之坊	日快	〃	
大林坊	日源	〃	
大乘坊	実修院日定	〃	
了雲坊	了雲坊日祐	〃	
秀悦坊	日桜	〃	
林行坊		塩沢	
大円坊	大円坊日性	〃	

円 本 円 文 円 山 慶 教 玉 蓮 忠 蓮 岸 光 淨 証 顯
 正 応 台 殊 柳 之 成 泉 蔵 成 光 秀 之 玄 立 明 立
 坊 坊 坊 坊 坊 坊 坊 坊 坊 坊 坊 坊 坊 坊 坊 坊 坊

円 本 日 東 日 日 日 日 日 忠 日 日 淨 妙
 正 心 日 光 日 日 日 日 日 光 日 日 隆 首
 院 院 日 院 日 日 日 日 日 房 日 日 房 院
 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日
 精 恵 用 遣 城 徳 運 養 護 在 生 貞 教 松 授

〃 西 中 〃 逢 〃 〃 〃 〃 〃 〃 南 〃 〃 〃
 谷 谷 嶋 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃
 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

26

一 正 大 実 通 西 常 円 実 蓮 浄 大 大 戒 佐 円 玉
 行 運 遊 円 感 之 住 応 教 信 心 心 運 善 倉 理 泉
 坊 庵 坊 坊 坊 坊 坊 坊 坊 坊 坊 坊 坊 坊 坊 坊

蓮 玄 大 日 日 尊 浄 三 日 日 日 日 日 日 円 日
 古 性 大 日 日 雅 印 宝 日 日 日 日 日 日 理 日
 院 院 房 日 日 日 日 日 院 日 日 日 日 日 院 日
 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日
 乘 乘 守 透 在 廷 隆 宥 誦 濃 隆 義 養 性 逾 仁
 ⑳

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

以上百十六ヶ坊

この他『坊跡録Ⅱ』に拠って開創された支院を補うと

浄安坊 隆安(浄か?) 棚之沢

支院名 開基 場所 開創年代

寂照坊 二十一世 日乾 西谷

観道坊 二十九世 日蓮 上ノ山

大光坊 // //

法久庵 無安 日養 // 二十九世日蓮代

法明坊 正山 // 三十一世日脱代

妙福坊 三十三世 日亨 西谷

常唱堂 // 三門

顕盛坊 顕了院 日盛 上ノ山 正徳三年(一七二三)

樹下庵 四十二世 日辰 東谷

上妙坊 五十三世 日奏 西谷

大縁坊 了達 波木井 五十五世日暹代

松寿庵 松寿院 中谷 文政七年(一八二四)

開創年代未詳の支院は

至	常	凉	仙	恵	盍	普	能	仁	逢	了	了	寂	知	妙
言	經	池	応	善	簪	賢	生	宗	泉	円	慶	光	恩	法
坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	庵	坊	坊	庵	坊	坊	堂
智円院	智門院			恵善院	開珠院 院妙順日 院妙染日 院妙染日 院妙染日	学善院	誠明院		逢静院	了円院	仙寿院 宝聚院 了慶院	寂光院 法入日 清信士	観応院	五十八世
日定	日行			日信	日喜 日信 日尼	日量	日宣	日泉	日大 日徳	日宗 日祥	日運	日環		
〃	〃	〃	〃	西	〃	〃	南	醍	東	塩	東	西	〃	東
				谷			谷	醐	谷	沢	谷	谷		谷

支院名

開基

場所

天保五年（一八三四）
嘉永三年（一八五〇）

吉	福	妙	松	感	中	本	十	本	合
祥	聚	石	樹	井	之	種	如	種	計
坊	坊	坊	庵	坊	坊	坊	坊	坊	百
									五
		学				本			十
		禅				種	本		三
		院				院	種		ヶ
		日				殿	院		坊
		逢				妙	妙		
						信	坊		
						日			
						観			
						大			
						比			
						丘			
						尼			
西	〃	田	松	追	西	西	上	〃	
谷		代	ノ	分	谷	谷	ノ		
			木				山		

合計百五十三ヶ坊

『坊跡録Ⅱ』は、寂照坊・観道坊・大光坊・法久庵・法明坊は正徳二年までに開創とするが、『坊跡録Ⅰ』は載せない。両者の著わされた年代からみて、この点では『坊跡録Ⅰ』の方が信憑性があり、これらの支院はまだ開創されていないと考えられる。

註

- ① 「秋元御書」定 一七三九頁
- ② 「庵室修復書」定 一四一〇頁
- ③ 同 一四一一頁
- ④ 宮崎英修「日蓮聖人晩年の健康をめぐって」(『大崎学報』一〇三号)
- ⑤ 「兵衛志殿御返事」定 一六〇六頁

- ⑥ 「曾谷殿御返事」定 一六六四頁
- ⑦ 石川是行「日蓮聖人一代図会」(『実友と妙了尼』所収)
- ⑧ 『志摩坊諸事留記』安政二年 志摩坊蔵
- ⑨ 「西山村の発祥」(『西山総合調査報告書』)
- ⑩ 「地引御書」定 一八九四頁
- ⑪ 齊藤一暁『身延山と日蓮聖人』
- ⑫ 「上野殿母尼御前御返事」定 一八九六―七頁
- ⑬ 「波木井殿御報」定 一九二四頁
- ⑭ 『日蓮教団全史上』 五一頁
- ⑮ 同 五二頁
- ⑯ 同 六五頁
- ⑰ 松木本興『端場坊縁起』
- ⑱ 『身延文庫目録』
- ⑲ 『坊跡録Ⅰ』
- ⑳ 『身延山史』 四九頁
- ㉑ 同 六一頁
- ㉒ 室住一妙『行学院日朝上人』 九〇頁
- ㉓ 同 一三三頁
- ㉔ 『身延山史』 一六一頁
- ㉕ 『坊跡録Ⅱ』には「宝徳二年(一四五〇)六月十五日開闢」とある。
- ㉖ 同 「山本坊十六世隠居」とある。

第二節 身延山八谷

以上のように山内支院の開創総数は百五十三ヶ坊を数える。これらの支院は、甲斐国志に「堂塔僧坊ノ基置セル所七谷アリ鶯谷・西谷・東谷・醍醐谷・蓮華谷・金剛谷・中谷ト名ツク身延鏡加三南谷^①為三谷八^①」と述べるように、古来より鶯谷・西谷・東谷・醍醐谷・蓮華谷・金剛谷・中谷・南谷の八谷に建て置かれたと表現されてきた。しかし

「坊跡録Ⅰ」「坊跡録Ⅱ」とも鶯谷・蓮華谷・金剛谷の名は載せない。

鶯谷は本院のすぐ南、現在菩提梯のあるあたり一帯を言い、「坊跡録Ⅰ」の、ここに建て置かれていたと推察される南之坊の項に、「本在三方丈下南」、焼失已後近三方丈故引移西谷莊嚴坊地」。北之坊の項に「此寺初在三方丈下、為火用心移西谷」とある如く、日朝が現今の地に本院を移転して以降、本院の安全を計る意味で、ここに建て置かれていた支院を他に移転させていき、更に三十世日通代の菩提梯の建設も影響を与えたと思われる、「坊跡録Ⅰ」の著わされた日亨代には、既に一坊も建て置かれていなかったと考えられる。

蓮華谷は地理的に南谷と区別がつかない。

金剛谷は、今村是竜氏作成の地図によると

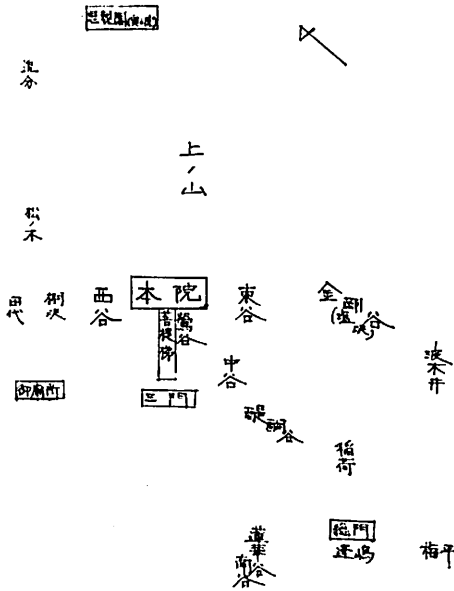
三門の南としてあるが、貞享三年の「身延諸

堂軒数覚」には「塩沢金剛谷ト云六坊」とあり、身延鑑には「裏門を出れば金剛谷、東谷

の内なり」とあるに拠って、塩沢が金剛谷である。

以上簡単に図示すると下図の通り

各場所に建て置かれた支院数は左記の通り



場所	支院数	場所	支院数
東谷	25	南谷	15
塩沢(金剛谷)	7	稲荷	1
醍醐谷	9	逢嶋	2
中谷	6	上ノ山	18
西谷	52	田代	7
三門	1	松ノ木	1
棚沢	3	追分	1
鶯谷	3?	梅平	1
波木井	1		

註

- ① 『甲斐国志』下巻 一一三頁
 ② 端場坊蔵
 ③ 『身延鑑』 二九頁

第三節 本院と支院

身延山支院は、上述したように日蓮聖人に直接給仕し、ないしはその廟所を守る段階で成立してきたと伝えられるが、やがて本院の発展につれて、支院の住僧は本院の恒例・臨時の行事等に関与し、奉仕するようになり、文字通り本院を支えるようになっていった。十一世日朝制定の身延山年中行事にみられる年行事・月行事等は、その実証である。^①

近世になると、その集権的封建体制の中で、本支は完全に一体化していく。例えば二十八世日奠は、池上の日豊等と共に寛文元年（一六六一）以来しきりに不受不施派を連訴し、教団内における受派の主導権確立を計ったが、この時期に支院から盛んに起請文が出されている。

起請文之事

一対本院貫首不義仕間敷候縦雖為満山一同於我等者敵対仕事御座有間敷事。

右之趣於相背者可蒙法花経中一切之三宝別元祖日蓮大士御罰者也

干時 寛文第五乙巳年

五月吉日 武井坊 日述（花押）

日奠尊師様^③

起請文は寛文四年（一六六四）から同八年（一六六八）にかけて出されており、不受不施問題に関連して、本支一体を確認し、この問題に全山一致して取り組もうとする意図からであろう。

またこの頃になると、支院は本院に対して確実に義務を負うようになってくる。

定 西谷円正房

瑞光院日貞代当房永代修営料金子五拾兩取之馬依此薰功此一代房役免許之并此次一代住職可任瑞光院意者也所定
如件

正徳三癸巳年三月十三日

身延山三十三世

遠沾院 日亨（花押）①

坊役とは具体的には不明であるが、同じ日亨の『坊跡録Ⅰ』に載る年行事や月行事と共に、本院に対する義務をさしていることは確かである。またこの「定」から、本院の貫主が支院住職の選任権を持っていたことも明らかである。

註

① 室任一妙『行学院日朝上人』 六九頁

② 高木豊「寛文法難前後」（『日蓮宗不受不施派の研究』）参照

③ 身延文庫蔵

④ 志摩坊蔵

第四節 支院の廃合併

開創された百五十三ヶ坊は、万延時代には建て置き支院数九十三ヶ坊となり①。更に廃仏毀釈や火災等は、多くの支院に廃合併を余儀無くさせていった。

廃合併の支院		建て置き支院	年	代	註
浄	栄坊	玉蔵坊	三十二世	日省代	常栄坊と改名
春	窓坊	十行坊↓南林坊	宝永二年（一七〇五）	以後	焼失故。後に改名
		養泉坊↓秀悦坊	宝永元年焼失、同二年再建		再建して改名
頭	成坊	積善坊	宝永七年（一七一〇）		
実	道坊	敬神坊	宝永年中		地震破損故
浄	進坊	忠光坊	正徳元年（一七一二）		

観松坊 蓮成坊

〃

焼失故

莊蔽坊 南之坊

〃 正徳三年(一七二三)

宝永八年南之坊焼失後方丈近き故、莊蔽坊へ引移し、合併して南之坊とする。

忍脱坊 成道坊

〃

忍脱坊成道庵と改名

学立坊 瑞光坊

〃

瑞光坊は不宜な処故学立坊を合併して瑞光坊とする

本住坊 智寂坊

三十四世 日裕代

檀那なく損滅せる本住坊の地へ新建立

蓮明坊↓光玄坊

了雲坊↓高雲坊

〃 (一八二八)

光玄坊廃寺、この地へ了雲坊再興して高雲坊と改名

一円庵

文政十一年六月三十日

流出故諸尊位牌等松寿庵へ移す

浄心坊↓感応坊

文政頃

破壊故再建して改名

仙応坊 清閑坊

天保年中

清閑坊焼失故仙応坊を合併して清閑坊とする

秀悦坊 高雲坊

弘化二年(一八四五)

両坊大破故合併して、秀悦坊高雲庵と改名

松寿庵

嘉永七年十一月四日

地震皆潰故諸尊本尊等本院へ納置

浄隆坊 蓮盛坊

万延元年十二月

焼失故

至言坊 大林坊

慶応元年十二月十四日

焼失故

顕盛坊 円台坊

明治四年七月十二日

②

明治七年(一八七四)一月十三日、山梨県は

妙法堂・了慶庵・蓋簪坊・渋谷坊・大縁坊・信行坊・常経坊・本学坊・凉地坊・正運坊・常唱堂・清閑坊に廃寺を

申し付けた。

③

明治七年十一月廿六日、一山會議は以下の支院の廃合併を決定した。^④

廃合併の支院		建て置き の支院		廃合併の支院		建て置き の支院											
円	普	隅	了	下	秀	円	感	南	林	南	妙	真	善	杉	武	円	法
柳	賢	之	雲	之	悦	応	応	南	行	延	音	浄	網	之	井	正	雲
坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	林	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊
								延	延	延	智	端	〃				
山	花	林	岸	窪	志	覚	大	延	延	延	智	端	〃	武	井	玉	法
之	之	之	之	之	之	林	林	寿	泉	盛	寂	場	〃	井	井	泉	雲
坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊
法	常	大	本	蓮	佐	慶	戒	一	松	南	芳	玉	円	円	正	玉	法
久	住	蓮	種	信	倉	林	善	行	林	向	春	泉	正	正	正	泉	雲
庵	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊	坊
本	〃	本	西	籠	〃	〃	円	〃	〃	北	〃	〃	法	法	雲	雲	雲
		行	之				教			之							
院		坊	坊	坊			坊			坊							

文殊坊	積善坊	法明坊	〃
常栄坊	東之坊	十如坊	〃
妙仙坊	山本坊	十妙坊	〃
寂光坊	松井坊	円光庵	〃
仙台坊	円台坊	妙福坊	〃
通閑坊	定林坊	松樹庵	〃
上妙坊	南之坊	感井坊	〃
了源坊	樋沢坊	完道坊	〃
実教坊↓光精坊	清水坊		

その他

廃合併の支院

建て置き
の支院

年代

註

隆源坊↓覚樹坊↓善綱坊

武井坊

明治七年十二月十五日

知恩坊

〃

仁宗庵

明治八年一月十日

身延小学校とする
明治八年一月十日類焼失
類焼失後再建なし

⑥

明治十年(一八七七)七月三日、山梨県は、以下の支院の廃合併を指令した。⑦

廃合併の支院

建て置き
の支院

廃合併の支院

建て置き
の支院

西之坊

本行坊

樋沢坊

法雲坊

円 教 坊 林 藏 坊 東 之 坊 山 之 坊

この他

大運坊・大心坊・長安坊は年代未詳松林坊へ合併^⑧。大円坊・証明坊・蓮秀坊・忠光坊・教泉坊・慶成坊・真善坊・宗幸坊・吉祥坊・福聚坊・淨安坊・了閑坊・長松坊・長寿坊・清耀坊・中山坊・宗林坊・宗賢坊・見塔坊・仁淨坊・中之坊・寂照坊・実円坊・本妙坊・法蘭坊・芳心坊・清玉坊・慶雲坊・貞俊坊・妙応坊・春光坊については不明である。

以上、焼失・無檀・無住・山梨県からの指令等により、百二十一ヶ坊が廃合併せられて、明治十年現在支院数は三十二ヶ坊である。

註

- ① 『身延山史』 二六八頁
- ② 『坊跡録Ⅱ』 参照
- ③ 『身延山史』 二九〇頁
- ④ 同 二九六―八頁
- ⑤ 『坊跡録Ⅱ』 参照
- ⑥ 同参照
- ⑦ 『身延山史』 三〇二頁
- ⑧ 『坊跡録Ⅱ』 参照